

登山月報



戸倉山



8月11日 みんなで山を考えよう!
 祝「山の日」
 全国「山の日」協議会
 山に親しむ機会を得て 山の恩恵に感謝する

第13回ボルダリングジャパンカップ	2
パラクライミング日本選手権大会2018	3
Mt.Jiazi 6,540 北西壁 SOLO Expedition 2017	4
第112回 Mountain World	8
「山の日」制定記念 一ふるさとの山に登ろうー	9
積雪期レスキュー講習会報告	10
第8回自然保護指導員研修会 報告	11
平成29年度全国理事長会議報告	12
JMSCA、寄贈図書、編集後記	13



スポーツ振興基金助成事業

独立行政法人日本スポーツ振興センター

第13回ボルダリングジャパンカップ

村岡正己

会場：駒沢オリンピック公園総合運動場屋内球技場

期日：2018年2月3日(土) 予選

2月4日(日) 準決勝・決勝

駒沢オリンピック公園の
リニューアルオープンした屋
内球技場が第13回ボルダリ
ングジャパンカップの会場。



昨年の代々木に次いで東京での連続開催となった。観
戦料は準決勝・決勝の前売りで2500円。昨年の500円
アップとした。大会前の2月1日には完売となり、当日
は満席の1661人の観戦者で会場を埋めた。

決勝女子では、野口啓代が全完
登で11度目の優勝を決めた。ユース
世代が迫る中、底力を発揮。改めて
女王の存在を見せつけた。準決勝
1位の森秋彩との争いは見応え
があった。第3課題では、野口がバ
ランスのトラバース課題を4トライ



野口啓代

で解決、残り数秒で
完登し会場が沸いた。その課題を森は
1撃で完登し1位に躍り出る。(QRコー
ド1：第3課題野口、QR1森の映像)



QR1

そして、第4課題では、伊藤ふたば、野口啓代、野中
生萌と完登する。その歓声を壁の後ろで聞き状況は、分
かっての出番。ラウンジ課題の第4課題。10回以上のト
ライをするが、苦手なのか手は届いているように見える
が保持できずに終わる。

男子は、藤井快が3連覇を達成。
決勝第1課題は全員が完登。第2課
題は上部がスラブのバランス課題。
ゴール前で苦戦する選手が続出する
中、最後に藤井快が1撃で完登。去
年の優勝も全員が登れない課題を
完登し、もぎ取っている。そのシー
ン蘇る。第3課題は全員が完登。



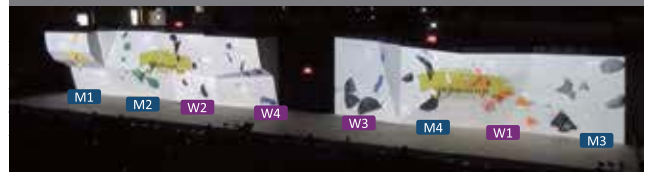
藤井快

逆に第4課題は、パワー系の厳しい課題。各選手が
ボーナスに終わる中、村井隆一が1撃
で完登し2位に食い込む。3位には楢
崎智亜が入賞した。(QRコード2：第
1課題藤井、村井の映像)



QR2

女子 順位	姓名	都道府県 /所属	課題1		課題2		課題3		課題4		完 登	ボナ ス	準決勝
			T	B	T	B	T	B	T	B			
1	野口啓代	茨城県	1	1	3	3	4	3	2	2	4T10	4B9	3
2	森 秋彩	茨城県	2	1	3	3	1	1	×	×	3T6	3B5	1
3	伊藤ふたば	岩手県	3	1	3	3	×	4	3	2	3T9	4B10	5
4	尾上 彩	福井県	2	1	×	×	×	5	×	×	1T2	2B6	6
5	野中生萌	東京都	×	1	×	×	×	4	3	2	1T3	3B7	2
6	谷井菜月	奈良県	×	1	×	×	×	11	×	×	0T--	2B12	4



男子 順位	姓名	都道府県 /所属	課題1		課題2		課題3		課題4		完 登	ボナ ス	準決勝
			T	B	T	B	T	B	T	B			
1	藤井 快	東京都	1	1	1	1	2	2	×	2	3T4	4B6	1
2	村井隆一	千葉県	1	1	×	1	3	3	1	1	3T5	4B6	6
3	楢崎智亜	栃木県	2	1	×	1	1	1	×	1	2T3	4B4	2
4	原田 海	大阪府	1	1	×	1	2	2	×	6	2T3	4B10	3
5	石松大晟	熊本県	3	2	×	1	1	1	×	1	2T4	4B5	4
6	杉本 怜	東京都	1	1	×	2	4	4	×	3	2T5	4B10	5



大会は、常に選手、観客が満足できるよう努めている。
課題(ルート)の設定はその最たるもの。今回は十分そ
の役目を果たしたと考えます。また、審判や運営エリア
を最小限にとどめ観客席を前にもってきた。そして、決
勝オープニングのプロジェクトマッピング、競技中
の選手情報のビジュアルなど昨年よりバージョンアッ
プ。競技が終わって帰られるお客様より「面白かった」
「感動した」などのお言葉を頂いた。これを糧にさらに大
会運営の向上に努めていきたい。

尚、今回来日したIFSCの事務総長DebraGawrych
氏が観戦。選手のパフォーマンス、運営に評価を頂い
た。最後に、この大会に関わった皆様方のご支援、ご協
力により無事終了することができました。厚く御礼申し
上げます。

大会データ

- ・選手 男子96名女子61名(エントリー)
- ・観戦者 4日1661名(最大)
*障がい者(車いす1名、視野障がい1名)
- ・メディア 3日 27社54名(記者13 フォト15 TV26)
4日 47社104名(記者22 フォト29 TV53)
- *露 出 新聞 21(4日~6日)
Web 26(3日~5日)
TV 9(3日~4日、00:11:21)
- ・スタッフ数 152名(協力会社除く)
- ・救 護 3日 5名(1名棄権)
4日 3名

パラクライミング日本選手権大会2018

今回で3回目を迎えたパラクライミング日本選手権大会。今年、総勢29名のパラクライマーが1月28日、明治大学和泉キャンパス総合体育館に集った。

障害の内訳はB(視覚障害部門)クラス(男子B1・6名、B2・4名、B3・6名、女子B1・1名、B2・3名、B3・2名、RP(神経障害部門)男子RP2・1名、RP3・2名、女子RP3・2名、AL(脚欠損部門)男子AL2・2名)と障害の分野もさまざまであった。受付を済ませた選手は、Bクラスの選手にはIBSA準抛の診断書を提出してもらいクラス分け専門のドクターに判定をしてもらい、他の障害の選手は別室で機能判定を専門員にってもらい障害のクラスを決定した。出場者が増えたため、全員のクラスが判定するまで時間を要した。

予選は、RP2の車いす部門のルートが1本。Bクラス・RPクラス・ALクラスが2本の同一ルートで、フラッシュ形式で行った。ブラインドクラスの選手には控室でコースナビゲーションの音声メモを繰り返し聞いてもらい行った。

RP2の大内選手は去年の大会でも優勝している。予選課題はゴール取りで力尽きる。

Bクラス・RP3・ALクラスは昨年の大会より2グレードアップしていた。Bクラスの選手には下からホールドの位置を大会役員が指示して登ってもらう(世界選手権ではコーチがホールドの位置関係や登り方をアドバイスしてよい)。前回の世界選手権優勝者のB1小林選手、B2会田選手は余裕で完登する。結局Bクラスは7名の選手が2完登という素晴らしい成績であった。

決勝にはBクラス男子8名、女子4名、AL、RP3クラスの上位3名 RP2は1名、計16名が進んだ。決



右から会田選手、前岡選手、吉田選手、大内選手、大槻選手



Bクラスは下からホールドの位置を伝えてもらって登る

勝はオンサイト。ただしBクラスはオブザベーションの代わりに音声ナビをアイソレーションエリアで繰り返し聞いてもらう。

決勝の1番手はRP2カテゴリーの大内選手が登る。車いすを役員二人が抱え取り付きに運び、トップロープをハーネスに装着する。予選より難易度の上がったルートをキャンピングの要領でゴールを目指す。終了点は三角形のハリボテ。その最後の一手が遠く、何度も取りに行こうとするが取れず、見ている周りの者がもうだめかと思った瞬間、ゴールをつかむ。会場から大きな拍手が沸き起こる。大内選手の登りは、今までの世界選手権での様子から見て十分入賞可能なパフォーマンスであった。

続いてAL、RP3、Bカテゴリーの決勝。ALは大槻選手。前々回の世界選手権スペイン大会にも出場している。当時は腕の力だけで登るというスタイルであったが、欠損の右足大腿部もうまく使い登っていた。RP3の吉田藍香選手はアメリカ在住でアメリカチャンピオンでもあり前回の世界選手権フランス大会では3位に入った実力者。難しい左トラバースを突破し上部へと進んだ。もう一人のRP3の吉田桃花選手は左手の力が入らないという障害があり、このトラバースの処理に力を使いフォール。Bカテゴリーの選手たちもこの左トラバースでフォールする選手が多くいた。その中でB2の会田選手とB1の小林選手が安定した登りで完登する。

Bクラス男子は会田祥選手がタイム差で、女子は前岡ミカ選手が総合優勝。RPクラスは吉田藍香選手、ALクラスは大槻智志選手、RP2(車いす)クラスは大内秀之選手がそれぞれ優勝した。

手探りで始めた単独でのパラクライミング日本選手権大会も今回で3回目を迎えた。回を追うごとに参加選手、観客も増え大会として形になってきた。パラク

ライミングの広がりレベルの向上を実感するものであった。

パラスポーツでは障害の程度によってカテゴリーを分けなければならない。大会が成立するためにはある程度参加者がいなくては大会が成立しない。今回は、決勝に進める選手を障害の程度1, 2, 3ごとに選ぶのではなく、ブラインド部門の上位8名というように実力のある者が決勝に進めるようにした。その結果、B部門ではより障害の重いB2クラスの選手が優勝することになった。障害が軽いものが登れるのではなく、障害の程度に関係なく実力がある者が登れることを証明した。

今年は9月に世界選手権が開催される。前回のパリ大会ではB1, B2クラスで1位。RP3クラスで3位と出場した4人中3人がメダルを獲得した。今回はそれ以上のメダルを獲得することも可能であると感じた。世界選手権に向け合同練習会も設け更なるレベルアップ

プを目指していきたい。

この大会のためにご協力して下さった明治大学様、ミレージャパン様、アディダスジャパン様、クラス分けをして下さったメディカルパネルの先生方、大会役員の皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

最後に、JMSCA主催でのパラクライミング日本選手権大会は今回で最後となりました。来年度以降は新たに設立された日本パラクライミング協会(JPCA)が大会を主催し、パラカップ並びに世界選手権大会への代表選手選考・派遣を行っていきます。JMSCAから離れますが、皆様のご支援・ご協力でパラクライミングを日本に広めレベルアップを目指していききたいと思います。よろしく願いいたします。

(パラクライミング日本選手権大会2018実行委員長

JPCA代表 佐藤 建)

Mt. Jiazi 6,540 北西壁SOLO Expedition 2017

○はじめに

正直まだ、敗退を受け入れられずにいる。壁の状態がどうであれ、思い描いた理想のラインが繋がらなかった事実には変わりはない。このままでは次に進めそうにない。

前へと進むためにはまず、この山行を芯から受け止め、理解する必要があるだろう。その試みのひとつとして、まずは言葉にしてみたいと思う。

○山の選択から出国まで

この山は3年前に一度トライを試みたが、出国1ヶ月前に山の仕事で足首の二分靭帯を断裂してしまい、直前に断念せざるを得なかった経緯がある。

足首の怪我が長引き(再び山のソロが出来るまで2年の歳月を要した。)漸く今回のトライとなった。

山に行けない間はひたすら、フリーに没頭した。足は細くなり、たいして険しくもない登山道をボルダーマットを担いで20分アプローチするにも面倒臭がる自分がそこにいた。そのかわり、ボルダーは4段が2本、オンサイトが2段+、3段がコンスタントに落とせる程にグレードはあがった。そしてまた、ノーマットにこだわった。山に行けない間、やはり自分の命を脅かすような、ヒリヒリした感覚を欲した。激しい緊張感の中で我を忘れていくあの感覚をいつもどこかで求めていた。アルパインでは、ソロではなおさら、絶対的にミスは許されない。また、ロープソロをしている時も基本的には常



嘉子峰北西壁1500mをソロアルパインスタイルで登る。傍線が今回予定していたライン

にランナウトしている状況がほとんどだ。そういう絶対に落ちてはいけない状況下で、あるいは、墜落が致命的な場面に追いやられる状況下で、いかに自分をコントロールし、適切なムーブを起こし続けるのはソロの絶対条件だと思う。そしてまた、これはソロの基本的な素地さえあれば、それ以降は鍛練によってひたすら洗練され、ある種の純潔さを増してゆく。

この山は3年前から僕の心に住み着き、夜毎怯えさせ、また、怪我がまったく治らない時希望を抱かせ、国内の冬壁であまりの悪天に心折れそうになった時、ソロの継続中、弱気になり挫けそうになった時、あらゆる場面で鼓舞してくれた。

「おい、いいのか。そんなんで挫けてるようじゃ Mt. Jiazi は登れないぞ」

いつしかそれがこの山と僕の合言葉になっていた。

2年間のブランクはそれなりにこたえた。フリーのグレードは著しく成長したが、昨年のはじめには、遠征は到底無理だと思っていた。八ヶ岳の南稜、広河原

やジョーゴ沢、中山尾根からはじめたが、2日間山に入ればシングルブーツが入らなくなるほどに足首は腫れぼったく、その後3日は疼痛が続いた。しかし、それでもまた週末には山に入った。昨シーズン山に入らなかった週末はインフルエンザにかかった年末しかなかった。

モチベーションとは偉大だ。確固たる目標があれば、大抵の事は耐えられるようになる。痛みも例外ではない。そんなこんなで1月には60キロを背負って3日間継続出来るようになっていた。その頃から本格的にMt. Jiaziを想定したトレーニングを開始した。

一例をあげれば以下の通り。深夜特急以外はソロ。

※米子不動：コブラ、不動戻し、夜叉、龍神、アナコンダ、※戸台：象の鼻、一番星左ライン、※錫杖：深夜特急11d（パートナーあり11d 2テン最終ピッチ割愛）、1ルンゼ、1ルンゼ左、バードランド チムニールート、※荒船山：昇天の氷柱、※宝剣：中央稜

南アフリカ、ロックランズから帰って来てからは、滝谷でひたすら継続した。また、Mt. Jiaziが標高差1,500mなのでスケール感覚を身体に覚え込ませるため、北岳バットレスの継続も2回した。例えば、1日目アプローチ、D沢奥壁。2日目シュバイツェルカンテ、下部フランケ、上部フランケ。3日目、十字クラックなど。1日の山行で壁の標高差2,000m以上をノルマにした。

山はボルダーのように一発集中では登れない。何時間も、時には何十時間も行動するのは当たり前だ。そのすべての時間で集中力を最大限に保つのは精神がもたない。精神も肉体と全く同じように持久力があり、消耗が激しければいずれその機能は停止する。簡単などころ、つまり2の体力、2の精神力、2の技術力で死なずに登れるところを確実に2の力で登る事が長時間山で行動する肝になる。ソロでは特に精神の持久力が重要になる。簡単な長いルート等も定期的にトレーニングに取り入れたほうが身のためだと僕は考えている。

最後は富士山に2泊3日を2週にわたって2回入った。富士山ではひたすらボルダリングと山頂ダッシュを繰り返した。最終的には一週19分30秒を切るまで順応は進んだ。

フリーのグレードはジムでロープソロ13a、ボルダー3段を保ったまま、ドライツールングで冬の錫杖や足尾で11台前半を一撃出来るようになり、自信もかなりあった。ただ、それを許さない程に壁はもろくプロテクションも取れなかった。そしてまた、氷が張らない程に気温も高かった。Mt. Jiaziは南西にグローブナーがあり、風は

○出国からトライ

壁の情報はいくつか、ネットに落ちている写真だけだった。

ある程度、壁の状態に左右されるとは予想していたが、あまりに状態は悪かった。成都入りした翌日、同じ宿に泊まっていたグローブナー隊と仲良くなり一緒に食事しながら、様々な情報を聞いた。「5,600mで雨だったよ。」彼はそう言って、グローブナーから撮ったMt. Jiaziの写真を見せてくれた。ほとんど雪や氷がないように見えた。そして、それは光の反射や解像度の問題ではなく、忠実に現実を写実していた。また、アプローチから、この山がいかにかボロ壁であるかが、察せられた。氷河は堆積した岩の下で、周辺から常に落石の音がこだましていた。アタック時、つまり2回目のアプローチには、谷は一変し、1回目の偵察時に通った所は、壁が30m程崩落しており（1回目のアプローチでは岩雪崩と落石を警戒してルンゼを避け、崩落した壁の基部をトラバースした）、10秒に一回程落石が頻発し、いつ岩雪崩が起きてもおかしくない蟻地獄のようなルンゼの上いくつかある、バスくらいの岩が微妙な角度で待ち構えている。

18日に順応と荷揚げを含め取りつきまで偵察した時点で第一候補のラインは下部が300m程雪も氷もなく中間部もあるかなきのベルグラでヘッドウォールにいたっては雪も氷も皆無だった。

中国ペアの「自由の舞」も下部が400m程、雪も氷もなかった。唯一取りつきから、雪がついているのが、右よりのラインだった。ただ、このラインもレッジ付近が明らかに繋がっていなかった。この時点で本来予定していたラインは絶対に不可能であると悟った。

出国前はある程度、雪や氷がなくてもドライで登ればいい。そう思っていた。そしてそれを想定したトレーニングもしてきた。ドライツールングで冬の錫杖や足尾で11台前半を一撃出来るようになり、自信もかなりあった。ただ、それを許さない程に壁はもろくプロテクションも取れなかった。そしてまた、氷が張らない程に気温も高かった。Mt. Jiaziは南西にグローブナーがあり、風は



一切当たらない。そして、ほぼ西壁なので太陽が12時半を過ぎるともろに当たる。壁全体がMt. Jiaziだけホットスポットになっている。そのため、18日、壁の基部で日中16℃、下はジャージに上は半袖に薄いロンT 1枚で少し動けば汗が出るほどだった。取りつきには、大小様々な落石が多数あり、そのどれも当たれば一発であの世行きだ。もっと気温が冷えなければ、取り付けさえしない。ビザの期限ギリギリまで待てば(11月20日)可能性はあるかもしれない。この時はそう思っていた。

もっと気温が冷えて、雪や氷が発達しなければ論外であったし、翌日から天気が5日程荒れる予報でもあったため、大した距離ではないため一度村に降りた。ベースから村までは僕の足で約5時間。転進も考えたがこの時はまだ、繋がると楽観的に淡い期待を抱いていた。大いに気を付けなければいけないが、モチベーションは時に過剰な希望的観測を自身に強いる。そして冷静な判断を狂わせる。

村には温泉もあり、宿には動物達がたくさんおり、心身ともに癒された。

村でもやはり天気は悪く、レスト中晴れた日は一度もなかった。しかし、雨、雪以外は周辺の山でボルダーをして身体を動かし、コンディショニングをしていた。周辺はベースも含めボルダー天国でレスト日はひたすら開拓をしていた。

予報では27日から2日間好天になる予報だった。雪崩のリスクを考えて27日アプローチ、28日からアタック。3日目、4日目は天気はよくないかもしれないが、太陽が当たれば、雪崩、落石、落水の嵐になるのは目に見えていたし、アバラコフさえ出来ないほどに氷が緩むかもしれない。下手をすれば下降時、下部400mほどは雪や氷さえなくなっているかもしれない。そう考えて敢えて下降予定日は悪天時に降りることとした。

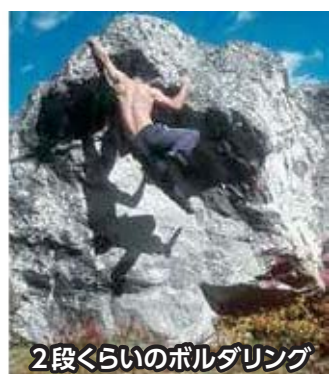
27日、ベースに上がってみると自分の目を疑った。テントは5日間の悪天で雪に潰され風に無惨に吹き飛ばされ、ポールは折れ、シートは至るところ破れ、食料は高所食以外すべて動物に食べられていた。敗退は少しも考えなかった。ベースに半分残したギアだけが心配だったが何とか無事だった。愕然としたが予定通り、壁の基部へとアプローチを開始した。

アプローチは一度目の偵察時とは一変し、谷はいたるところ崩壊していた。いかに危険な氷河であることをこの時再認識した。壁に入ってしまうとクライミングの楽しさにある程度山の理不尽さには耐えられるが、壁へのアプローチにかなりの危険が潜んでいる場合は精神的にかなりこたえる。また、救助が一切届かない不安もま

た、不必要に恐怖を募らせた。

壁の状態は5日間の悪天でもさして変わりなかった。本来予定していたラインも「自由の舞」も下部が400mほど、雪も氷もなく、論外だった。ただ、右よりのラインがもしかしたらレッジが繋がっているかもしれない。その可能性に賭けるしか他に道はないように思えた。その一縷の望みに賭けて翌日、登攀を開始した。ほとんどフリーソロになる想定をしてギアはギリギリまで切り詰めた。ロックギアはゼロ。アルパインヌンチャク8本、ダブルロープ60m1本、5mmの細引き60m+捨て縄用に30m。スクリュウ5本。寝袋(テントなし)。ウレタンマット、ガス、コッヘル、オートミール100g、プロテイン150g、羊糞2本、ヘッデン、これが全てだった。このラインは50度くらいの雪壁から始まり、ところどころ80度から90度がワンポイント出てくる平均斜度60度から70度ほどの氷雪壁である。

気温が高いため、雪はグサグサに腐っており、快適な登攀とは程遠かった。氷と呼べるものはほぼなかった。行けども行けども雪水でプロテクションは一切取れない。ほとんど垂直なセクションでさえ穴だらけだった。軽量化と遠近感覚を失っていたせいか、気付いたら5、600m付近まで登っていた。うっすらとレッジ付近が見えたが、やはり、繋がっていないようだった。もう少し標高が上がれば氷が出てくるかもしれない。雪も安定するはず。ここでもモチベーションは悪い方向へ働いたと思う。頭では確実に理解していたはずだった。12時半を過ぎれば太陽が当たる、状況は良くなるどころか急激に悪くなる。次の日から予報では、3日間悪天が続いた後、1週間ひたすら快晴だった。ビザの期限は11月20日だが、移動などを含めるとアタックは10日。壁の状態は悪くなることはあっても良くなることはないようだった。北西壁のトライは確実にこれが最後になる。そんな思惑があったため、僕は諦められず登り続けた。その後、200m程登ってもまともな氷は出て来なかった。この時、確実に出口のない閉ざされた円環の中にいるのだと悟った。



2段くらいのボルダリング



敗退の決断が遅すぎた。太陽が周辺を暖めはじめると、壁は悪辣な表情を呈しはじめた。チリ雪崩、落石、落氷がはじまった。いまだプロテクションは一切取れない。これ以上は危険過ぎる。万が一フリーソロで登れたとしても降りられないのは明白だった。Mt. Jiaziの北西壁に安全に降りられる下降路はない。いずれにしろ、北西壁のどこかを降りなければいけないのだ。そこではじめて冷静に状況判断出来たと思う。一步クライムダウンしたが負荷が違う。荷物を背負っては降りられないと判断し、アックスを深く突き刺し、ロープも含めスクリュウ2本以外、ザック丸ごと取りつき目掛けて投げた。ミスをすれば確実に死ぬ。至るところに死へのきっかけは潜んでいた。

「ノックアウトされるボクサーはノックアウトされている」と言ったのはダマトだったか。こんな、いつ死んでもおかしくない危険なことを自ら進んでやりながら、なおかつ楽しくて仕方がないなんてどう考えても狂気の沙汰だろう。ふと、壁に向かいながら自らの行おうとしている行為におののき、息がつまり身動きができなくなりそうになる瞬間がある。

そんな時、こう自問せずにはいられない。

俺は死を望んではいないか？

俺は本当は死にたがっているのではないか？

俺は本当に生きていと望んでいるだろうか？と。

激しい心はきっといつの世も生き長らえる事を望んではいないのだろう。

常に致命的に何から何までを損なう危険を内在させた事象が自分のまわりに飽和している刻一刻と悪くなる状況下で如何に玲瓏な意識を保持し、適切な判断をし続けられるか。それが大事なのだ。誰もが自分の命は大事だろう。だから生に執着する。けれど、その過剰な執着は心を不安定にしたり、時として本来の自由を奪い、冷静な判断をさせなくする。ソロでは特にそうだ。シリアスな状況では考えていいことと、考えてはいけない事がある。このままずっと登り続けたい、このままずっと頂きを踏むまで山にいたいという強烈な願望が脳裏をよぎる。しかし、そうすれば必ず生きては帰れないだろう。頂きを踏まずに下山する。その想いは心を切り刻まれるようだった。発狂しそうになる精神を必死に押さえながら、チリ雪崩と落氷が頻発するルンゼをもくもくと取りつきへとクライムダウンを繰り返した。

○最後に

ラインが繋がらず、もちろん悔しかったし自分の力と思う存分ぶつけられもしなかった歯痒さもある。壁の状態がどうであれ登れず少なからず失望はしていたと思

う。そして本音を言えば怒りも。

自分はこの1年なんの為にトレーニングしてきたのか。それはとりもなおさず、この壁を登るためだった。

目の前でレッジを見た訳でもないのに敗退を決めた。もしかしたら、目の前まで行けば突破口は見つかったかも知れない。自分に、30m以上の垂直の氷(おそらくプロテクションも取れない)をクライムダウンできる能力があれば、下降も可能だった。ベースに帰還しても、村に降りる途中にも、もう少し出来たのではないか。そんな思いが渦巻いてくる。失望や落胆は自己嫌悪を伴って自分自身に襲いかかってくる。村でも煩悶は続いた。誰かに側にいてほしいが、絶対に話しかけられたくない。そんな感覚だった。

本当に不可能だったのか？ただ、己の精神、技術がなかったただけではないのか？今でも自身に問わずにはいられない。

山で起きうるすべての事を引き受ける覚悟、意志があったはずだった。

死を覚悟していたにも関わらずおめおめと敗退し生き延び、死から見放された深いニヒリズムへと落ち込み生きながら死んでいる生の屍として生きるくらいなら覚悟ある死を選んだほうがマシだ。

それが自分にとって生へしがみつく唯一の方法であり、答えの様に思えた。

はじめてこの山の写真を見た時から今まで、そしておそらくこれからもこの山の頂上へと続くラインは完登するまで続いてゆくのだろう。

山が心に巣くったあの日からいかにこの山と向き合ったか……。

その時間が濃密であればあるほど、クライマーとして成長出来るのだと思う。憧憬に身を委ねた日々はいつしか確固たる目標となり、世間の波に溺れそうになりながらも、幾千の時を山の中で足掻き倒した。

そしてまた僕の心の中に今、新しい山が住み着いている。この山に自分の全てをぶつけてみたい。

この山のラインが頂きへと続くよう、僕はこれからもアルパインクライマーとしての日々を生きてゆく。

○日程

10月13日：羽田～成都～ホテル、14日：成都、15日：老榆林、16～17日：Lomoshe BC、4,500m順応、18日：Mt. Jiazi BCへキャラバン、19日：偵察・荷揚げ5,000m取付き、20日：周辺の山で順応、ボルダリング、21～26日：老榆林、27日：BC～取付き、28日：北西壁アタック、29日：BC、30～31日：老榆林、11月1日：成都、2日：羽田
(記 鈴木常晃)

第112回 Mountain World

冬季K2隊分裂、登頂も成らず

池田常道

1月号、2月号でポーランド隊の冬季K2挑戦とナンガ・パルバット救援についてお伝えしたが、あらためて今季の冬季登山を総括しておきたい。

まず、K2(8611m)である。ヒマラヤ冬季登山のベテラン、クシストフ・ヴィエリツキが率いるポーランド隊13人は年明け早々に入山。南南東リブにルートを探ってC1(5900m)とC2(6300m)を建設した。

ところが1月25日、ナンガ・パルバット(8126m)に登頂したトマシュ・マツキェヴィッチ(ポーランド、43)とフランス女性エリザベート・ルヴォル(37)のペアから、登頂後にマツキェヴィッチが体調を崩して動けなくなったという救助要請が入った。ヴィエリツキ隊長はこれに応じ、最強メンバーのデニス・ウルブコとアダム・ビエレッキにヤロスラフ・ボトールとピョートル・トマラを付けて送り出した。

救助費用はポーランド山岳協会がクラウド・ファンディングなどで集めることになり、K2BCに急派されたパキスタン陸軍ヘリが4人をピックアップ、ナンガ・パルバットC1下の4800m地点まで運んだ。27日の夕方になっていた。ウルブコとビエレッキは休む間もなく登攀を開始、西壁通常ルートの固定ロープを利用して、5時間半の夜間登攀で一気に1200mを登った。

一方ルヴォルは、目が見えなくなったマツキェヴィッチを7200mの最終キャンプまで誘導した後、迎いのヘリが来ると聞いて、ひとりで下降した。6800m地点のクレバスでビバークしたルヴォルは、ヘリの爆音を聞いて下降を急ぎ、5950mに設けておいたC2へと向かったが、ウルブコたちが自分のほうに向けて登り始めていることはまだ知らなかった。

ウルブコとビエレッキは先に登り着いたが、ルヴォルはまだ帰っていなかった。極度の疲労で、20m下りるのに1時間もかかるほどだったのだ。下で見守る仲間から「下降中のヘッドランプが見える」と聞いた二人は大声でルヴォルの名を呼び、両者はキャンプの上50mのあたりでランデブーできた。すぐ持参したビバークテントに入れ、水分と薬を与えると、ルヴォルは数時間眠ることができた。

この時点で7200mの高所にいるマツキェヴィッチの

搜索は断念、衰弱したルヴォルの救助に全力を傾けると決断。凍傷で懸垂下降できない彼女を助けて、二人はキンスホーファー・ウォールを下り、28日ルヴォルはイスラマバードへ運ばれ、フランスに帰った。

ウルブコらはヘリでスカルドに飛んで、悪天候の間2日間休養し、ヘリでK2ベースまで帰った。南南東リブの攻撃は2月2日から再開したが、ビエレッキが7日に落石を顔面に受けて鼻骨を骨折。2日後にはラファエル・フロニアも落石を受けて前腕を骨折。ウルブコは登攀継続が可能だが、フロニアはスカルドに送られ、帰国せざるを得なくなった。

あいついだ事故と悪天候のため、ヴィエリツキ隊長は南東稜への変更を指示した。ウルブコは、2月第4週の週末に単独アタックを敢行、嵐のため肩の下、7600mから引き返した。彼はビエレッキを誘ったものの辞退され、隊長の許可を仰がないまま独断専行した。

彼は、かねてからポーランド勢の進行が遅いことに不満を漏らしていた。マカルーもガツシャブルムII峰も2月のうちにケリを付けてきたウルブコは、そのことをインターネットのインタビューで明らかにもした。これに怒ったヴィエリツキは、ウルブコが隊のインターネットを使うことを禁じ、単独攻撃でなにかあったら、隊の全員が救助にかかりきりになると、勝手な行動を批判した。ウルブコは3月を待たずに隊を去った。

その後3月初めにビエレッキがヤヌシュ・ゴワブと登って見たところ、C1への固定ロープは80cmの積雪に埋まり、C3までの各テントも被害を受けた恐れがある。好天が期待できるのは11日の一日だけという予報も加味して、3月第一週に断念を決めた。



ナンガ・パルバット西壁。右側ピンクの線が西壁通常ルート、左の赤い線はルヴォルとマツキェヴィッチの登攀ルート。左端の青い線は2000年メスナー隊の試登

「山の日」制定記念

—ふるさとの山に登ろう—

長野・ふるさとの富士山、戸倉山(1681.0m、とぐらさん)

昨年8月6日に長野県山岳協会の行事として「ふるさとの山に登ろう、夏山登山教室」が行われました。

南アルプスと中央アルプスの間の長野県駒ヶ根市の伊那山地には「伊那富士」と呼ばれる山があります。「戸倉山」と言いますが地元の駒ヶ根市からでは富士山の様には見えず、北側の伊那市や箕輪町付近から眺めると富士山の様に見える事から「伊那富士」と言われています。

山頂は双耳峰となっていて西峰と東峰があり、東峰に一等三角点1681.0mがあります。その間は220m、5分程です。山頂からの展望は素晴らしく西に恵那山から空木岳、木曾駒ヶ岳、経ヶ岳などの中央アルプスの殆どの山が見えていてその間に伊那谷が広がり、東に南アルプスの仙丈ヶ岳、甲斐駒ヶ岳から北岳、間ノ岳、農鳥岳、塩見岳、赤石岳、聖岳などが木々の葉が落ちた時期なら見る事ができます。

駒ヶ根市中沢の戸倉山キャンプ場が代表的なコースの出発点となりますがコースは駒ヶ根市側の「キャンプ場コース」「上の森コース」「沢コース」があり伊那市長谷側からは「一之瀬コース」「竜東遊歩道コース」と四方から登る事ができます。

戸倉山は古くから霊峰として知られた山で行基により天平九年(737年)に開山されて山頂に行基自ら手彫りした「十蔵薬師如来」が置かれたと言う言い伝えがあり、「十蔵」から「とぐらさん」と呼ばれる様になったと言う事です。現在は平成四年に安置された大きな石の薬師如来坐像が置かれています。

キャンプ場から登りだすと30分程の所に馬止の松があり、昔村人が柴刈りや薪拾いの時に馬を繋ぎ止める目印の松と言われています。また登ると「猿の松」、「報恩の松」とも呼ばれる松の木があります。猿を助けた猟師の妻がお産の時に猿の恩返しで無事に産む事が出来たと言う伝説の松です。そのすぐ先に天狗伝説の岩があります。村人が天狗を騙して団扇(うちわ)を奪い、怒った天狗が岩になったと言う伝説です。その上の八合目に金明水と言う水場がありますが枯れている事が多い水場です。そこに四阿(あずまや)もあり休憩場所となっています。九合目をすぎると西峰に出て中央アルプスや伊那谷の展望が開けます。山頂標識があり、不動明王の石像や幾つかの石碑も置かれています。駒ヶ根市と伊那市の境となっていて反対側には伊那市長谷で置いた山頂標識もあります。



西峰から東峰に向い一旦下ると鞍部に戸倉山避難小屋があります。六畳間程の小さな小屋ですが良く整備されています。最後の坂を上ると東峰に着きます。大きな石の薬師如来坐像が置かれていて一等三角点があります。キャンプ場からゆっくり2時間30分程で山頂まで登る事ができました。地元でも人気の山で子供たちでも登る事ができる山として親しまれている山です。

広い山頂で全員で休憩して昼食をとり、頃合を見て夏山登山教室が開かれ、参加山岳会の講師から装備についての講習が行われました。ツェルトの使い方や必ず用意すべき理由などを説明しました。

山岳遭難者数全国一位のワースト県である長野県では何とかしようと、登山計画書の提出を義務化する事になりました。計画書を提出したからと言って遭難しないとは限りませんが、事前に何の予備知識も持たずに険しい山に登る事が問題なのです。

登山はスポーツです。スポーツは作戦を立てなければ勝つ事は出来ません。山についての事前の調査と装備の用意が生死を分けます。登山届を事前に作るという事がその作戦に当たります。登山口に来てそこで置かれている用紙に記入すれば良い訳ではありません。登山口に着く前に良く山を調べて計画書を用意して安全登山で山を楽もうと言う事を参加の皆さんに説明しました。

ゆっくりと下り全員無事に戸倉山キャンプ場へ下る事が出来ました。ここで最後の安全登山についての講習が行われて夏山登山教室は無事に終了しました。参加者の皆さんにも満足して頂いたふるさとの富士山、戸倉山登山でした。

(長野県山岳協会副会長 伊久間幸広)

第12回山岳スキー競技日本選手権大会 参加申込み受付中!!

期 日 4月14日(土)～15日(日)
会 場 柵池高原から天狗原にかけての斜面。
<http://www.jma-sangaku.or.jp/>
<http://skimojapan.wixsite.com/skimojapan>



積雪期レスキュー講習会報告

平成29年度積雪期レスキュー講習会が1月26日(金)～28日(日)に谷川岳の土合山の家周辺で行われた。この講習会はtotoの助成を受けて開催されたものでクラス1、クラス2、クラス3の3コースの講習を行い、34名が受講した。初日、2日目は寒波のため降雪も多かったが、講習に支障はなく、3日目は青空のもとでのシミュレーションとなった。

開校式後、日本雪崩ネットワーク(以下JAN)の出川講師より今年の雪崩事故報告を受け、雪崩現象について学んだ後各クラスに分かれた。

クラス1はJANのセーフティーキャンプに準じた内容でJANの出川さんが講師として参加、服巻常任委員が主任講師を務め受講者は9名であった。初日は室内にて雪崩現象や雪崩地形、降雪と積雪、積雪の不安定性、雪山・雪崩地形での行動、埋没者の捜索救助等を学んだ。2日目、3日目は屋外での実習となり、行動判断やグループマネジメント、積雪観察や地形利用、捜索訓練等が行われた。

クラス2は15名の受講者で、石田遭対副委員長と一本松常任委員の2班に分かれた。

このクラスは、セルフレスキューを中心とした講習内容で、1日目は全体でビーコン、プローブの基本操作、埋没体験や掘り出しを行った。夕食後、低体温症についてクラス3と合同で学んだ。2日目は2班に分かれ、昨日の捜索活動に加え、初期救助のロープワーク、搬送用梱包、スノーマウント等を学び、3日目、学んだことの一連の流れとしてシミュレーションを行った。

クラス3は基礎技術習得済みの方が対象で、レスキュー技術の習得を目指した講習内容となる。11名の受講者で角田常任委員が主任講師を務め、2班に分かれた。室内にてビーコンやプローブの操作、掘出し、



開校式

梱包、ロープワークを学び、屋外にて雪面での支点、ロープワークのシステム、雪面観察、捜索演習、ビバークサイトの構築を行った。3日目、シミュレーションとして班毎の救助活動を行った。

今回の受講生は今までに比べて意識も高く、非常に効率よく講習を進めることができた。ビーコンの操作方法を予習してきてもらうことで、より効率的に講習が行えるという意見があった。受講生から申込方法の提案もあり、受講者を増やすためにも今後改善していきたい。(日山協事務局 蒲池さよ子)



埋没者の掘り出し



要救助者の梱包・搬送訓練

南米アンデスを代表する華麗な氷峰群をめぐる充実トレッキング

アンデス・ブランカ山群 トレッキング 11日間

発着地 東京 旅行代金 ¥526,000～¥546,000

出発日 5/15(火)・5/25(金)・6/5(火)・6/19(火)・8/21(火)・9/11(火)

※燃油サーチャージ(2018年1月20日現在:約21,000円)が別途必要です。

旅行企画・実施 観光庁長官登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員/ボンド保証会員

ALPINE TOUR サービス株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海ビル4階 ☎03-3503-1911

大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557

e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

第8回自然保護指導員研修会 報告

1月21日午後、国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、関東地区から60名が参加して第8回自然保護指導員研修会が開催された。

冒頭、主管者・主催者挨拶の後、埼玉、千葉、東京、神奈川から自然保護活動の状況報告があった。続いて基調講演は、ジャーナリストの米倉久邦氏から「人と森のかかわり」の演題で行われた。

(講演の要約)

森は人にとって無くてはならないもので、それによって生きて、繁栄してきた。森とは切っても切れない歴史を歩んできた。古代、メソポタミアやクレタなど森を無くしては成立しなかった文明だ。そして、森を破壊し尽くして、森の消滅とともにそれらの文明が消滅した。すなわち、人類の栄枯盛衰は森とともにあった訳で、現在もこのようなことが起きている。日本も例外ではなく、森を破壊し尽くした歴史もあり、一方で失った森を再生する努力もあった。「日本の森と破壊」例として、田上山(標高約600m)、足尾銅山(栃木県上都賀郡)、襟裳岬(北海道)の紹介があった。

まず、田上山は、琵琶湖の南に位置するこの山は、嘗て緑で覆われていた山塊であったが、古代日本の藤原京造営やその後の平城京遷都や寺院の造営などに松を数万本伐採して用いたとされ、そのことで花崗岩質の山肌が露出し、年を経て風化した真砂土(砂質土状に変質した花崗岩)が雨の降る度に流出し、流域に洪水を頻発させた。江戸時代から現在に至るまで、砂防ダムの設置や植林などによる治山・治水工事がすすめられ、巨額の経費と人々の懸命な努力によって次第に緑が回復してきた。

足尾銅山は、日本の近代化に貢献し、銅鉱業で繁栄した。一方、銅精錬で排出する亜硫酸ガスの煙害や鉱滓の水質汚染に加え、精錬炉の燃料としての木材供給の森林伐採によって、森や林床の植生を衰退させ荒廃地を出現させ、裸地化した斜面では降雨のたびに大量の土砂が流出し、洪水を起こし下流域へ災害を招いた。精錬方法の改善により煙害がなくなった昭和31年から本格的な緑化事業が着手され、「植生盤」と呼ばれる独特の植栽方法が採用され、緑化が大きく進展した。ボランティア団体による治山施工地への植樹活動が盛んに行われている。

襟裳岬はかつては、柏の木を主体とする広葉樹で覆われていたが、明治時代以降に燃料として過伐が行わ



熱心に聴講する参加者

れ、岬に特有の強風に晒されて、火山灰の堆積した赤土の見えるハゲ山となった。砂漠化した大地は「襟裳砂漠」と呼ばれる荒廃を招いた。さらに、海草類や回遊魚等の水産業が衰退するに至った。昭和28年に緑化事業が始められたが、強風によって困難を極めた。試行錯誤を重ね雑海藻(ゴタ)で苗床を覆う植栽方法を得て、緑化事業開始から50年ほどを経て百人浜のクロマツ林が緑に覆われる景観となった。

以上の三例のほか、自然破壊は日本のあちこちで起きてきた。それを元に戻す大変な努力をしてきたのも人間、壊したのも人間。自然破壊とは一体何んなのかを考えるには格好の材料である。こうした破壊と再生は、全てそれなりのニーズがあって、人々が生きていくために行われたことで、その「つけ」が回ってきて、大災害が繰り返され、自然破壊が齎す厄災であった。

視点を変え、森の状況を紹介する。日本の森林面積は2500万ヘクタール、国土面積の7割弱、森林率では67.7%。つまり、日本森林は世界の先進国ではずば抜けて高い。フィンランド、ノルウェーに次いで世界3位で、日本は大変な森林資源を誇る国である。森林面積のうち、人工林が4割でスギ、ヒノキ、カラマツの針葉樹が占めている。それは、第2次世界大戦中や戦争直後の大量の伐採を経て、昭和20年代後半から造林が進められ、また高度成長期の拡大造林によって草地・原野や里山二次林が人工林に転換されたことによるもの。拡大造林の時期で一気に植えられた樹木が伐期齢を過ぎ放置されたままの森が殆んど。それは、1964年の木材輸入の自由化以降、わが国の木材輸入量は急増し、外材に依存する状況が定着したことから、現在の木材自給率は20%前後で、林業の低迷を招き、貴重な国家資産が有効に利用されずに過熟老齢林となって持ち腐れ状態に陥りつつある現実がある。また、シカの生息密度が著しく高い地域の森林においては、皮剥ぎ、枝葉や下層植生などへの食害が著しく進

行しているといった環境問題も重なる。

ここで自然保護について、上高地の例を考えてみる。今はその面影がないが、かつて上高地は松本藩の主な財源の木材の産地であった。上高地は世界的にも珍しい勾配が0.7%の広大な高層台地であり、氷河期のころには湖であり、温暖化で決壊して今の姿が出現し、川の氾濫も繰り返し、河畔に森林を形成した。観光地化される前までは林業が盛んに行われる場所であった。上高地を流れる梓川には、ダムや護岸壁ができて、洪水による氾濫が無くなった反面、氾濫によって再生を繰り返したカワラヤナギなどの植生や自然環境に与える影響は良好とは言えない。「あるがまま」とするの

が自然保護なのかどうかを考えてほしい。

最後に、屋久スギや立山スギの森、巨木があっても維持し続ける森林のことを例にして、森は木を切つて、更新することが必要で、過熟老齢を放置すれば森は衰退する。巨木の森でも行われてきたが、切り株に定着した種子は、芽生えた後、下草などによる日照不足を緩和でき、また倒木自身が養分の供給元となって樹木に育ち、森の更新が繰り返される。そして、「森は、人の関わりこそが重要で、前向きにどうかかわるべきかを認識するべき」と結んだ。

(文責 自然保護委員長 松隈 豊)

平成29年度全国理事長会議報告

2月18日(日)に東京・渋谷のフォーラムエイト514号室にて平成29年度全国理事長会議が開催された。会議には八木原会長ら理事・監事・委員長ら23名と44都道府県岳連(協会)理事長(含代理)・高体連登山専門部事務局長が出席。

開会に先立ち八木原会長から「昨年末に登山部の全体会議を持ち、登山振興のテコ入れを話し合った。10年先のことを考えても仕方がないが、組織にこだわらず、協調しながら登山界を挙げて盛り上げていきたい。」と挨拶。

1. 説明事項

(1)組織改編について

尾形専務理事が組織管理・運営規程及び組織図に基づいて新たな組織改編と業務分掌を説明した。

(2)公益法人のガバナンス、インテグリティ、サステナビリティについて

合田常務理事がパワーポイントで説明。岳連も法人化すべきと求められたのに対し、種々意見が述べられた。

2. 報告事項

(1)平成29年度事業経過報告について

小野寺常務理事から資料に基づいて報告があり、一部訂正があった。

(2)平成29年度決算見通しについて

相良財務担当理事から資料に基づいて今年度の収支経過報告があった。

(3)平成30年度事業計画原案について

小野寺常務理事から資料に基づいて報告があり、一部日程等の訂正があった。

(4)平成30年度収支予算案について

尾形専務理事から、予算委員会での審議経過が報告された。

(5)国民の祝日「山の日」事業報告について

小野寺常務理事から資料に基づいて38件の実施報告があり、福岡岳連の8,000人参加のイベントに質問があった。

(6)「スポーツクライミング」競技事業報告について

小野寺常務理事から資料に基づいて国際大会での日本選手の成績が報告された。

(7)日山協山岳共済会平成29年度経過報告及び30年度事業計画案・収支予算案について

尾形共済会会長から資料に基づいて報告・説明があった。

(8)各岳連(協会)の事業報告書・決算書提出について

小野寺常務理事から各岳連の現況を把握するために情報を共有したいので、総会終了後に事業報告書と決算報告書を提出して貰いたい、と協力要請があった。

(9)日山協創立60周年記念事業募金について

尾形専務理事から資料に基づいて説明があった。

(10)諸般の報告等について

湯浅理事長(京都)から第57回全日本登山大会について説明があった。仙石常務理事からは、今後の安全登山指導者研修会及び全日本登山大会の予定と調整について説明があった。

3. 質問事項について

事前に各岳連(協会)から提出された質問事項については、回答を配布して担当理事及び委員長が補足説明を行った。

以上、15時に閉会した。

(記 尾形好雄)

日時 平成30年2月8日(木)
場所 岸記念体育会館・4階特別会議室
出席者 八木原会長、高橋、伊藤、平山各副会長、尾形専務理事、小野寺、水島、村岡、合田、仙石、蛭田、町田各常務理事、中畠、古屋監事 16名中14名出席
欠席者 亀山副会長、小日向常務理事

1. 議事

- (1)平成29年度30年1月常務理事会・議事録の承認について(事前送付済) 異議なく承認された。
- (2)全国理事長会議次第と報告事項について 項目の追加と2,3の質問があり、異議なく承認された。
- (3)第4回理事会次第について 文言の一部訂正と一部追加があり、異議なく承認された。
- (4)平成29年度事業経過報告(1月まで) 一部文言の訂正があり、異議なく承認された。
- (5)平成30年度事業計画案について 一部文言の訂正と計画日程の訂正があり、異議なく承認された。
- (6)山岳スキーアジア選手権派遣について 提案通り異議なく承認された。
- (7)平成29年度第3次補正予算について 提案通り異議なく承認された。
- (8)公式スピード公認検査員のトレーニング派遣について 羽鎌田直人氏の派遣を承認。
- (9)(一社)日本アーバンスポーツ支援協議会設立と共催依頼について 共催名義の内容及び赤字補てんについて確認を取る。
- (10)IFSCゴールドメンバーについて 賛成多数で、承認。
- (11)アジア選手権開催、岩手2020年について 2020年開催要望を承認。
- (12)2018年リード日本代表の承認について 3月は常務理事会がないので、メールで審議することを承認。
- (13)遭対委員会からの提案
- (14)S C部からの審議・報告事項について 上記(13)、(14)議案について関連があり、組織管理・運営規程の改訂が次回に提案されることになった。役員の実務について「公益法人の各機関の役割と責任」について資料に基づいて説明があった。役員賠償責任保険について検討することになった。

2. 報告事項

- (1)平成29年度30年1月度会計報告 資料に基づいて報告があった。
- (2)中瀬理事辞任願いについて 補欠理事の選任について合田常務理事が確認することになった。
- (3)国際オフィシャルルートセッターの資格取得について 資料に基づいて報告があった。
- (4)平成30年度予算案進捗について

- 口頭で予算委員会の経過を説明。
- (5)旅行代理店入札結果報告 6社によるコンペから2社に絞って再入札の経過が報告された。
 - (6)J S C回答書の修正について 1月常務理事会で承認された回答書に対してJ S Cより指摘があり、改めて改善策を記した回答書を提出することが報告された。
 - (7)W C M (Winter Climbers Meet) 企画書について 第10回W C M (3/10～11、スバリ岳・赤沢岳周辺)の報告。
 - (8)福井プレ国体実施要項 リハーサル大会としての第5回日本学生スポーツクライミング対抗選手権大会の開催要項が報告。
 - (9)J S C人材育成プログラムについて
 - (10)J O C インテグリティ教育プログラムについて
 - (11)外務省/J O C 外交推進事業 上記3項目について概略を説明。

3. 指導員・審判員 検定結果報告

- 山岳指導員認定
申請者：東京都山岳連盟
検定場所：那須岳・奥多摩
検定日：無雪期：2017年11月
積雪期：2018年1月
申請者：2名(矢ヶ崎晶、川住伸一)
提案通り異議なく承認された。

4. 後援報告、協賛等の依頼について

- (1)東北の高校生を富士山に(一般財団法人田部井淳子基金)の後援について
- (2)第1回オニコウベ山岳スキーレース大会の後援について
- (3)日本山岳写真協会「2018—山・われらをめぐる世界」の後援について 上記3件の後援は、異議なく承認された。

5. 専門委員会動静

- 1月(1月9日～2月7日)
- (1)ジュニア普及委員会 1月15日(月) 出席者：4名、委任：3名
ア)報告事項
①平成30年度ジュニア・普及予算案について
②ジュニア・普及情報交換会について(2月17日(土) 国立青少年オリンピックセンター)
③なすかし雪遊び隊2018について
④安全登山指導者研修会連絡会について(1/14、アルカディア市ヶ谷)
 - (2)国際委員会 1月9日(火) 出席者：8名
ア)奨励金の応募状況について 下期の応募状況はゼロ。
・栃木岳連70周年ロブジェ・イースト遠征(4/25～5/21)に石賀、久我両氏が参加
・キルギス レーニン初登90周年Fes.(7/21～8/14)例年通りに公募告知する。
イ)平成30年度総会/第57回海登研について(6月23、24日、栃木県青年会館コンセール小ホール)
ウ)国内外に向けてのHP案について 外国向け「About Japanese Mountains」内容について
 - (3)山岳スキー委員会

- 1月11日(木) 出席者：5名 ネット会議
ア)報告事項
①12/15～16中国WCについて 藤川、山田、小寺選手が参加 13ヶ国160名程度の参加。パーチカル種目 小寺37位、藤川38位、山田43位/43人、スプリント種目 小寺19位、藤川20位、山田35位/40人。
②大会予定について 2/27～3/1中国アジア選手権、3/17～18韓国、4/16カムチャツカ国内、4/20～21カムチャツカ欧州シリーズ
③FB skimojapanの開設について
イ)協議事項
①第12回日本選手権について 4月14、15日、梶池高原
②アジア選手権への選手派遣について
③来年度の山岳スキー委員会の計画、予算について
- (4)国体委員会 1月12日(金) 出席者：16名
ア)J O C特別報告 競技会中における他選手飲み物に、世界A D規程による禁止物質の混入行為の発生による、日本のスポーツ界への信用失墜行為への、選手、指導者等への責任ある行動と自覚への通知。
イ)報告事項
①福井国体山岳準備状況について
・岳連・池田町実施調整会議(12/26)
②日体協折衝報告について
・競技得点について
・追加競技要望について(条件整備など)
ウ)審議事項
①第73回国民体育大会準備状況について
②中央総務委員、正副審判長選任について
③来年度事業計画・予算(案)について
④来年度S C部委員について
⑤総会開催について
エ)その他
①ブロック別研修会について
②国体後催催の準備状況について
 - (5)指導委員会 1月15日(月) 出席者：20名
ア)夏山リーダー制度について
イ)大山氷雪技術研修会(2月17、18日)について
ウ)2018年度のS Cコーチおよび上級コーチ養成講習会の開催について
エ)新指導者制度について 山岳の新制度検討(カリキュラム作成、検定基準、テキスト)
オ)その他 次年度は、S C指導員講習会のテキスト、試験についても新指導者制度に合わせて改版する必要がある。
 - (6)S C医科学委員会 1月15日(月) 出席者：6名
ア)競技会医務担当割り当てについて
①パラクライミング日本選手権大会2018
②ボルダリングジャパンカップ(2月3、4日 東京 駒沢)
③リード日本選手権(3月3、4日 埼玉 加須)
④リードユース日本選手権(3月24、25、26日 千葉 印西)
イ)平成30年度予算案について
ウ)各業務担当委員より
①学術担当(代：六角委員)
②救護担当(中島委員)

- ③パラクライミング担当(樋口委員 代:六角委員)
- ④メディカルチェック、強化連携担当(西谷委員)
- エ)次年度業務計画について
- ①次年度業務計画
- オ)その他
- ①F I S E 広島大会について
- ②委員会データの保管について
- (7)指導委員会
- 2月5日(月) 13名出席、2名委任
- ア)夏山リーダー制度について
- 1月29日(月)19:00~21:00
- 都岳連事務所
- イ)山岳指導員
- ①申請者:東京都山岳連盟
- 検定場所:那須岳・奥多摩
- 検定日:無雪期:2017年11月
- 積雪期:2018年1月
- 申請者:2名(矢ヶ崎晶、川住伸一)
- ウ)大山氷雪技術研修会(2/17~18)について
- エ)アバランチトランシーバ及びプローブについて
- オ)富士山氷雪技術研修会(4/28~29)について
- カ)新指導者制度について
- キ)検討課題提案について

- 会設立総会・記者会見 於:渋谷尾形専務理事、小日向常務理事
- (3)東京都山岳連盟新春懇談会
- 1月20日(土) 於:JAL CITY 田町高橋副会長
- (4)J A C 東海支部新年会 1月20日(土)
- 於:名古屋市東区 ウィルあいち1F 八木原会長
- (5)日本スポーツ賞表彰式
- 1月22日(月) 於:パレスホテル東京 八木原会長、小野寺常務理事
- (6)第23回冬季オリンピック結団式
- 1月24日(水) 於:大田区総合体育館 八木原会長、尾形専務理事
- (7)印西市長表敬 1月25日(木)
- 於:印西市役所 八木原会長、村岡常務理事
- (8)日本ヒマラヤ協会 華甲新年会
- 1月27日(土) 於:主婦会館プラザエフ 亀山副会長
- (9)新潟県山岳協会創立70周年記念祝賀会
- 1月27日(土) 於:ホテルニューオータニ長岡 八木原会長
- (10)パラクライミング日本選手権
- 1月28日(日) 於:明大和泉キャンパス 村岡常務理事
- (11)レスキュー講習会(積雪期)
- 1月26日(金)~28日(日) 於:土合山の家 町田常務理事
- (12)高等学校登山指導者用テキスト等編集委員会 1月29日(月) 於:J S C 会議室 尾形専務理事
- (13)J O C - N F 強化連携会議
- 1月31日(水) 於:岸記念体育会館 小野寺常務理事

- (14)ハイパフォーマンス人材育成事業説明会
- 2月1日(日) 於:NTC 小野寺常務理事、安井強化委員長
- (15)2018年スポーツクライミング・キックオフ記者会見 2月1日(日)
- 於:NTC 八木原会長、尾形専務理事、小野寺常務理事
- (16)外務省スポーツ外交推進事業会議
- 2月2日(金) 於:岸記念体育会館 小野寺・小日向常務理事
- (17)第13回ボルダリングジャパンカップ
- 2月3日(土)~4日(日)
- 於:駒沢オリンピック公園総合運動場 八木原会長、平山副会長、尾形専務理事、村岡常務理事、合田常務理事、小日向常務理事
- (18)日本山岳写真協会新年会
- 2月4日(日) 於:上野精養軒 亀山副会長

6. その他の重要事項

- 1月14日~2月4日
- (1)安全登山指導者研修会引き継ぎ会議
- 1月14日(日) 於:アルカディア市ヶ谷 尾形専務理事、仙石常務理事
- (2)(一社)日本アーバンスポーツ支援協議



編集後記

那須雪崩遭難事故からもうすぐ1年、それを受けて平成30年度から国立登山研修所及び全国高等学校体育連盟との共催で新規事業が始まる。又、山岳共済会ではアバランチ・トランシーバーを50台購入して加盟団体の講習会等に貸し出す予定です。春山シーズン気象変化に注意して引き返す勇気も必要だ。(広報担当 水島彰治)

寄贈図書

雑誌	(株)ネイチュアエンタープライズ	「岳人」No.849
	(株)山と溪谷	「山と溪谷」No.995
	(公財)健康・体づくり事業財団	「健康づくり」No.478
	(公財)日本体育協会	2017年1月29日号 体協フェアプレイニュース/体協スポーツニュース
	新潟県山岳協会	「新山協ニュース」第334号
	HAT-J	「HAT-J NEWS」No.108
	全日本ボウリング協会	「JBCnews」第555号
	兵庫県山岳連盟	「兵庫山岳」第608号
	富士山測候所を活用する会	「芙蓉の新風」Vol.12
	埼玉県山岳連盟	「埼玉岳連」通巻第59号
会報	La rivista del Club alpino italiano	「Montagne360」2018.2
	(公社)日本武術太極拳連盟	「武術太極拳」No.341
	(公財)日本ゲートボール連盟	「ゲートボールNavi」2017年度号
	日本勤労者山岳連盟	「登山時報」No.517
	日本ヒマラヤ協会	「HIMALAYA」No.484
	(一財)日本防火・防災協会	「地域防災」No.18
	(公社)日本山岳会	「山」No.873
	東京野歩路会	「山嶺」VOL.95
	La rivista del Club alpino italiano	「Montagne360」2018.1
	東京野歩会	「山嶺」VOL.95

一般財団法人 日本トレイルランニング協会 神奈川事務局

〒252-0184
 神奈川県相模原市緑区小淵1545-1
 ☎042-687-4011 FAX 042-687-3980
 E-mail kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp

NPO法人 北丹沢山岳センター

神奈川県・山梨県東部トレイルラン連絡協議会
 事務局 〒252-0184 神奈川県相模原市緑区小淵1545-1
 TEL 042-687-4011 FAX 042-687-3980
 E-MAIL kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp

- 北丹沢12時間山岳耐久レース実行委員会
- 陣馬山トレイルレース実行委員会
- 道志村トレイルレース実行委員会
- 八重山トレイルレース実行委員会
- 東丹沢ヶ瀬トレイルレース実行委員会
- 上野原秋山トレイルレース実行委員会

大会々長 杉本憲昭

登山月報 第588号

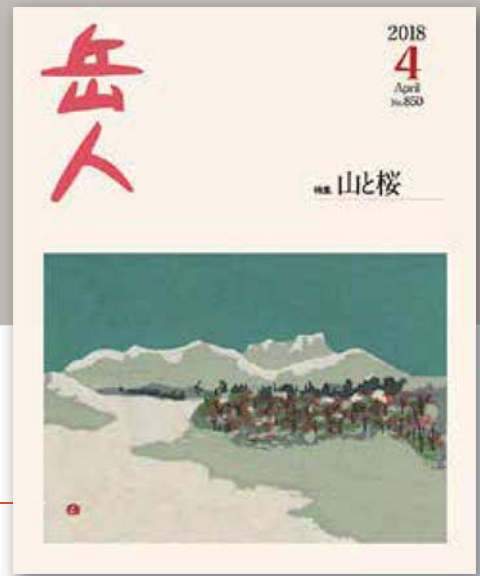
定価 110円(送料別)
 予約年間 1,300円(送料共)
 昭和45年12月12日
 第三種郵便物認可
 (毎月1回15日発行)
 発行日 平成30年3月15日
 発行者 東京都渋谷区神南1-1-1
 岸記念体育会館内
 公益社団法人
 日本山岳・スポーツクライミング協会
 電話 03-3481-2396
 FAX 03-3481-2395

山岳
雑誌

岳人

がくじん

山と人、時代をつなぐ「岳人」



4月号
発売中

【特集】山と桜

★モンベルのウェブサイト
全国のモンベルストアや書店にて発売中!

毎月15日発売 価格815円(+税)

年間購読がおすすすめです。

購読割引 **送料無料** **限定品プレゼント**

年間購読なら、お得な価格で毎月お手元に冊子が届きます。

通常本体価格12冊 年間購読12冊
~~9,780円~~ (+税) → **8,965円** (+税)

1年間で815円
1冊分無料

年間購読特典 岳人オリジナルグッズをプレゼント!

岳人フォールディング
スプーン

フィールドで活躍する
スプーン&フォーク。
岳人オリジナル
ケース付き。
※色はお選び
いただけません



▲折りたたみ時

さらに

はじめて
お申し込みの方に

ご継続の方に



岳人ピンバッジ



オリジナルBOX

年間購読
お申し込み方法

◎ウェブサイトで
<http://www.gakujin.jp/>

◎全国のモンベルストアで
<http://store.montbell.jp/>

お問い合わせ ☎ 0120-982-682 TEL 06-6538-5797
(モンベルポスト) ※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

「保険会社は、紙を多く使う仕事だから木を地球に返そう」と始めた運動でした。だけど

そんな単純な話ではなかった。

インドネシア・パリヤンで知ったことは「森林は地元の人たちが、生き残るために仕方なく木を切っていたという事実」。「植木に加え、果樹も育て果実を農民の新しい収入源にする」というプロジェクトをはじめよう。人と森・生きものが共に生きる場所を取り戻そう。

「植えた木の本数」「面積」といった数値だけでは本当の意味で熱帯林は再生しません。地域の人々と手を取り合って考えた時間が、明日の地球環境を再生させる。三井住友海上は、まだまだ勉強中です。

三井住友海上は、生物多様性の保全活動をすすめています。

立ちどまらない保険。

MS&AD 三井住友海上



あなたの 山岳保険は 大丈夫ですか？

山岳保険の加入は登山者のマナーです

日山協 山岳共済会 〒170-0013 東京都豊島区東池袋 3-7-11-707

TEL 03-5958-3396

FAX 03-5958-3397

E-mail sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp

月曜日～金曜日 10:00～17:00 (祝日除く)

携帯からも資料請求ができます。
公益社団法人日本山岳・スポーツライミング協会
携帯サイト (www.jma-sangaku.or.jp/mobile/)



WEBからもお申込みいただけます (www.sangakukyousai.com)